

革命前夜のモビリティ

John Thelwall と徒歩旅行者たち

佐々木郁子

イギリスの18世紀末は、徒歩や馬力での移動が主ではあったが、道路整備などにより人々の移動範囲が拡大していった時期にあたる。シンポジウム第2部門の第1発表では、「交通革命前夜」の文学作品でモビリティがどのように表されているかを論じる。分析するのは、John Thelwall (1764-1834) の代表作 *The Peripatetic* (1793) である。Thelwall はロンドン生まれのウェールズ系イングランド人、「独学の詩人で小説家、ジャーナリスト、編集者、政治理論学者、雄弁家」(Thompson 11) など多くの肩書を持ち、急進主義活動家としても知られる。*The Peripatetic* は、ロンドンから近郊の農村をめぐる徒歩旅行を題材に、寄り道や語りの脱線が繰り返される旅を、散文に詩などを織り交ぜ描いていくという、モビリティを意図的に用いた作品でもある。Thelwall の再評価と合わせ、本作品を「モビリティの詩学」として読み直す。道路、テムズ川、船舶を含む風景へ向けられる登場人物らの眼差しを追いながら、異なるコミュニティと積極的に交流していく彼らの自由な旅、それにより得られる社会観について論じる。

The Peripatetic の主人公(語り手)は、ロンドン在住の Theophrastus という詩人兼哲学者で、作家の分身的存在でもある。全3巻からなり、第1巻の序文では、主人公が哲学的思索にふけりながら郊外を散策し、親友の Ambulator を連れて、第2巻にかけて Rochester、第3巻では Saint Albans へ徒歩で出かけていく。彼らの徒歩移動には大きく二つの特徴があり、ひとつは都市と農村の比較を伴うことである。主人公は作品冒頭で、畑道を歩きながら、心と身体が活気づくを感じるが、それは埃まみれの馬車移動や都会の雑踏では決して得られないと語る(81)。しかし、その後の徒歩旅行では、田園風景を楽しむだけでなく、わざわざ高台から都市部を眺めたりもしている。都会の悪習が田舎へ持ち込まれること(337)や、田舎の人々が仕事や住まいを求めて都会へ出て不幸になること(136)への言及があり、文化慣習や人々の流動にも着目していることが分かる。もうひとつの特徴は、物乞いやジプシー、現地の労働者との頻繁なやりとりがあることだ。その過程で、下層階級の暮らしぶりがリアルに描かれ、怠惰や労働の搾取などの問題が浮き彫りにされる。

本作品の徒歩旅行者らは、都会と田舎を行き来しながら、異なる階層の人々との交流を通して、彼らが支えるイギリス社会へと視野を広げていく。このような態度は、本作品が紛失された Thelwall の南イングランド徒歩旅行記に基づくと考えられていることから、彼自身のものと言える。Thelwall はまた、執筆時に Laurence Sterne らの旅行記や旅行案内書も参照しており、それらと比較されることで、*The Peripatetic* の特異さが際立つことを期待していたようである。移動の描写の少なさ、登場人物らの「旅行のプロセスに影響を受けていないような」(Wallace 94) 態度からも、単なる徒歩旅行記ではなく、何らかの目的の下で「装置」として徒歩旅行を提示したものと思われる。

自らの意志で好きな時に(徒歩圏内の)好きな場所へ行くことができるのは、徒歩ならではのモビリティだが、本作品では、こうした徒歩旅行者の特性が明確に表されている。ひとつには、旅程があらかじめ示されないことである。主人公と好古趣味の Ambulator がその時々に関心を持った場所へ寄り道し、主人公の旧友 Belmour の悲恋の痛手を癒すような道を選びながら、自由気ままに旅をしている。さらなる特性は、立ち寄る場所が観光地に限られないことである。Thelwall が執筆時に参照したとされる案内書に、*Ambulator: or, a Pocket Companion in a Tour round London, within the Circuit of Twenty Five Miles* (1792) があり、Ambulator の由来とも言われている。*The Peripatetic* で主人公らが訪れる村々も、大半は本書やその他代表的な案内書に記載がある。彼らは旅行者よろしく、名の知れた村々をめぐり、高台に上がっては眺望を楽しむのだが、一方で、案内書で詳述されない村々の宿屋で休憩したり、記載されない土地の「ロンドン界限で最もピクチャレスクでない」(131) 教会墓地に足を踏み入れたりもしている。

主人公らは中産階級だと思われるが、先述の通り、ジプシーや物乞い、様々な職種の労働者と頻繁にやりとりをしている。そうした人々にとって徒歩は主な移動手段であり、路上は貧民の生計に不可欠の場であった。路上での、時に主人公らの命を脅かすものも含め、本作品では階級差を超えた交流が臨場感豊かに描かれている。作中では馬や馬車の利便性やモビリティへの言及がほとんどなく、主人公は「怠惰に馬車にぐったり座り、さまよう」(278) 人々を非難する。怠惰でない旅行手段として、また「移動方法において貧民と平等になる」(Jarvis 34) ために、徒歩が選ばれているようだ。本作品の徒歩旅行者のモビリティは、旅程や訪問地を主体的に選択でき、現地の人々との階級差を超えた交流が可能となるような、馬車利用時の制約から積極的に自由である状態として表されている。

本作品では、主要道路から脇道へ入るといふ振る舞いが頻繁に描かれる。主人公が散策時に語っているように、人通りが少ない畑道では「自由に孤独な夢に浸ることができ」(78)、そうした小径に気軽に出入りできるのは、歩行者ならではの特権である。その後の徒歩旅行で、主人公らは *Watling Street* を歩いていると思われるが、そこから繰り返し脇道に入っている。本作品が執筆された18世紀後半は、ターンパイク・マニアの時代にあたる。特に南東イングランドの都市部周辺の道路整備は進んでおり、ロンドン住民による近隣の田園地帯への旅が容易になったため、先にふれたような案内書の出版が促された。本作品でも、田園地帯への脇道が好んで取り上げられ、農民の労働や暮らしぶりも丁寧に描写されている。一方で、主人公は、一人で散策中に施しを求めてきた日雇い農夫に事情を尋ね(86-90)、*Ambulator* との徒歩旅行でも、農地が一部の農家に独占され、小農が酷使されている光景を目の当たりにして、声高に批判している(139-40)。大規模農業が推進された第二次農業革命期、すなわち農村と都市をつなぐ道に輸送の円滑化による国富増大への期待が寄せられていた時期に、主人公らはあえて速度を落とし、道を行き交う人々の声に耳を傾け、あるいは農地に足を踏み入れ、国富の源としての労働を観察している。

交通の改良を称えた *Adam Smith* が、陸運より海運の方が低コストだと考えていたように、国富増大において水上交通の果たした役割は大きく、本作品でもそれが示唆されている。特に *Rochester* への徒歩旅行では、テムズ川沿いのルートを取っていることもあり、主人公らの眼前には河川や船舶が頻繁に現れる。例えば、*Blackheath* の高台に上がった彼らは、河川とおびただしい帆船による雄大なパノラマを味わい、帆船が急ぎ向かう海を「世界の富が行き交う広大なハイ・ロード」(150)と呼んでいる。また、主人公が造船所へ立ち寄る場面では、建造中の巨大船舶を目の当たりにして、商品、人、慣習、学問や思想が大洋を行き交う様に思いを馳せている(94)。テムズ川が見渡せる場所や造船所への寄り道の描写からは、*Thelwall* 自身が水上交通の発展とそれが国内外にもたらす効果に強い関心を抱いていたことが窺える。独占や搾取に基づく国富に対し不快感を露わにする一方、それと密接に関わる交通の発展の規模や効果の計り知れなさに圧倒され、魅了すらされているところには、ロマン主義的アンビヴァレンスを見ることもできる。

徒歩旅行のモビリティは、主人公らに何をもたらすのか。徒歩のモビリティは、交通手段利用時の制約の無さに支えられているため、移動者は主体的に行動する自由を体感する。馬車移動の場合とは異なり、主要道路から、あるいは高台から風景を見渡すだけではなく、脇道に入っていく、風景の細部を見てまわることもできる。その場で生活している人々と直接言葉を交わし、いかにしてその風景が作られたのかを知ることでもできる。徒歩旅行は、こうした自由が体感できるために気晴らしになり、心身の健康をもたらすと考えられていた。例えば、主人公は作品冒頭で散策を始めるときに、「健康とレクリエーションのため」(78)と述べ、*Belmour* を徒歩旅行に誘う場面でも、体を動かし、路上の様々な出来事と風景に遭遇することで、傷心の彼が癒されるのを期待している(185-86)。徒歩は、そのモビリティにより自由を実感し、あらゆる健全さを回復する振る舞いとして表されている。

徒歩旅行は手軽さゆえに、反復される。ロンドン在住の主人公らが農村へ頻繁に訪れることは、自身のコミュニティを外側から見つめ直す契機になる。彼らが *Blackheath* などの高台から眺めていたのが、ピクチャレスクな田園地帯だけでなく、都市部やテムズ川でもあったように。都市の生活を支える農村の労働の実態を見聞きすることは、社会の構造を正しくとらえる視点の獲得にもつながる。注目すべきことに、本作品では、登場人物の性格や行動が“eccentric”であることが幾度も言及される。若い頃から郊外への散策趣味があった主人公は、徒歩旅行でも農村への寄り道を繰り返す。また、異なる階級、職種の人々へ歩み寄り、言葉を交わす。それら一連の振る舞いにおいて、都市が農村の、下層階級の搾取の上に成り立っていること、その不公平を解消しなければならないことを確認している。*The Peripatetic* の「エキセントリック・モビリティ」がもたらすのは、*Thelwall* が目指す社会改良を実現するのに必要な自由、健全さ、客観的で公平な視点なのである。*Rochester* 到着後に主人公が詠んだ農村を讃えた詩では、彼の旅の目的が、社会を知り、「傲慢な区別なく、すべての者の兄弟として」(279)改良を目指すものであると吐露されている。当時のロンドン中産階級のモビリティや、交通の拡大に伴う徒歩移動再評価の動きにいち早く着目していた *Thelwall* は、社会改革の契機をそこに見出していたのではないだろうか。

引用文献

Jarvis, Robin. *Romantic Writing and Pedestrian Travel*. Palgrave, 1997.

Thelwall, John. *The Peripatetic*. Edited by Judith Thompson, Wayne State UP, 2001.

Wallace, Anne D. *Walking, Literature, and English Culture: The Origins and Uses of Peripatetic in the Nineteenth Century*. Oxford UP, 1983.